

最推しの義兄を愛でるため、
長生きします！ 7

「アルバになら
何をされてもいいんだよ。
嫌いだって捨てられる以外」

「兄様を捨てるなんて
それこそ天と地がひっくり返っても
あり得ない……！」

アルバ・ ソル・サリエンテ

転生したら最推しが
義兄になっていた。
実は腹黒なところもオルシスに
似ているのかもしれない。

オルシス・ ソル・サリエンテ

義弟であるアルバを
心の底から愛している。
アルバが自分以外と楽しそうに
していると嫉妬することがある。

ルーナ

アルバとオルシスの妹。
ブルーノを家族だと思っ
ている。

ハルス・ソル・ サリエンテ

アルバとオルシス・ルーナの父。
愛娘と息子たちが
愛をはぐむことを寿ぎつつも、
やや胃痛きみ。

ブルーノ

アルバの妹、ルーナの
婚約者。
アルバ・オルシスの良き
保護者であり、守護者。

ミラ

この度ステファノ殿
下を出産した王妃。
豪胆で、
誰よりも芯が強い。



プロローグ

『光凛夢幻^{こうりんむげん}∞デスティニー』——俺が前世でハマりまくった、最推しのオルシス様が大活躍するゲーム。

その中で、『ラオネン病』という不治の病^{やまひ}により命を落とす、オルシス様の思い出の義弟アルバに、俺は生まれ変わった。

ゲーム内では、ヒロインと攻略対象者が国の存亡がかかる大事件を共に解決し、絆を深めていく。けれど現実では、攻略対象者及び主人公だけではなく、俺も事件の渦中にいた。

家族と、そして義兄となったオルシス様と共に事件を乗り切った俺は、無事誰の思い出となることなく、元気に毎日を過ごしている。

攻略対象者の一人であるヴォルフラム殿下は、紆余曲折^{うよきくせつ}あったけれども無事国王になった。

同じく、ゲームの主人公だったはずのミラ嬢は、ヴォルフラム陛下とくっついて王妃殿下となった。

そしてとうとう俺も、ゲームのオルシス様と同じ制服を着て、高等学園に通い始めた。

兄様は卒業後、ヴォルフラム陛下の側近として王宮に出仕することになり、朝は早く、夜は遅く

帰ってくるようになった。さすが兄様、国の中枢を担えるほどのハイスペック素晴らしい。でもそうなると、会えるのは朝早くか、夜遅くだけ。

そんな、兄様とのすれ違いの日々は何よりも辛かった。

このままでは心の潤いがなくなる！

そう思った俺は、兄様と共に通えるように王宮での仕事をゲットすべく、兼ねてから希望していた宮廷魔術陣技師の資格試験を受け、無事合格した。

魔術陣技師として王宮での席を確保したことで、まだ長期休暇に限られるけれど、婚約者でもある兄様との朝の馬車デートも確保したのだった。毎朝が楽しすぎる！

さらに、ミラ妃殿下ご懐妊の報が。

さらにさらに、アドリアン君の結婚と、ツヴァイト閣下の婚約――

たくさんさんの朗報が続いているけれど、私生活は楽しいことばかりじゃなかった。

二年生で初めてクラス委員になった俺は、セドリック君とジュール君にフォローしてもらいながら、少しずつ高位貴族子息としての立ち位置や責務を勉強していた。

そんな中、入学式の案内や合同キャンプというイベントが、実践として訪れる。

……イベント、目白押しかな？

ヴォルフラム陛下の手で、少しずつ王宮も変わっている。俺たちの学校では、市井から初めての女子生徒を受け入れることもなった。

こうして、波乱がないといいなと思いながら、新たな一年が幕を開けた。

入学式は、なんのイベントも起きないまま、無事過ぎた。

そして、ミラ妃殿下の体調がよろしくない状態で迎えた、兄様成分激薄の合同キャンプ。

俺は高等学園生クラス委員として、教え導く側で参加しないといけない。

俺に教えられることはあるのかな、と首を傾げつつも迎えた当日。

準備は万端、と休憩しているところで、麗しの兄様からの連絡があった。

セドリック君の持ち場で生徒同士が荒れる、という映像を刻魔法でルフト君が視たことを兄様に俺に直接伝えにきてくれたんだ。お忙しいのに！ 優しい！

セルジオ先輩が、兄様の笑顔は都市伝説とか何やら失礼なことを言ってたけどそんなことないよ？

無事セドリック君にそのことを伝えて、一応リコル先生にも対応してもらおうとしたその時、俺の刻魔法が発動してしまった。

聞こえたのは、セドリック君が揉め事に巻き込まれる音声。リコル先生のファインプレイにより、映像が視える前に口にレガーレ飴を突っ込まれたけれど、知ってしまった以上、これを放置するのはよろしくない。俺はまた、リコル先生と共にセドリック君のところへ飛んだ。

聞こえた声をもとにキャンプを過ごし、一日目の夜。

とうとうその刻魔法で予知したいざこざは本当になった。

セシル君という中等学園生が、セドリック君に縛り付いたのだ。

聞けば、宝玉の魔力が枯渇真つ最中のブルーニユ王国にお嫁に行ったお姉さんが心配なのだと

いう。

宝玉に魔力を無理やり注がれそうになった人を知っている俺たちが、ここまで聞いて放っておくわけにはいかない。かといって俺に何かできるわけではないんだけれど——

そう思っていたら、兄様が動いてくれた。

セシル君がきっかけで、とうとうこの国は、西隣のブルーニュ王国を救うように動き始めたのだ。手始めに、セシル君のお姉さん伝いでブルーノ君が『ラオネン病』の治験者を探しにブルーニュ王国へ向かった。

実は、そもそもブルーニュ王国が、魔力が多い人……要するに、宝玉に魔力を込められる人を派遣してほしいというの国に打診をしてきていたらしいんだ。けれども、それに簡単にいいよと言うわけにはいかない。自分たちの力で国を立て直してもらうのが一番だから。誰か適役はいないかと頭を悩ませていたところでセシル君がセドリツク君に泣きついてきた——という話。

実はセシル君のお姉さんは、隣国の王弟が興むじた大公家の次男に嫁いだそうなので、ばっちり中樞に食い込める人物だった。その人にレガーレの飴を渡せばなんとかなるんじゃないか。

つまりは、セシル君の願いは渡りに船だったということらしい。

それに、我が国のラオネン病だった子たちは全員完治したので、他国でも治験をしたかったという話もある。レガーレは、鮮度が落ちると効果が薄れていくから、栽培地のない他国でどうするのが課題だったのだ。

そのため、ブルーノ君と、そして光魔法の使えるツヴァイト閣下が隣国に旅立ったんだ。

手土産に持っていたのは、レガーレ飴と、俺が書いた『正しい宝玉への魔力補充方法』。

ブルーノ君とツヴァイト閣下がセシル君のお姉さんとその旦那さんをたぶらか……そのか……げふんごふん、お二人にブルーニュ王国の宝玉問題を解決してもらうために手土産をしっかりと渡し、セシル君はお姉さんの無事を確認し、ブルーノ君は初めての他国ラオネン病患者を完治させて、初外交は成功を収めた。

そんな大役をこなした二人が今日ようやく帰ってきたので、俺は兄様と共に二人をお出迎えし、離宮での再会を約束したのだった。

一、国の成り立ち

さて、俺は兄様と共にミラ妃殿下の休んでいる離宮に向かった。

ヴォルフラム陛下がついていてくれるので、それほど心配はしてないけど……嘘。絶賛心配中。だって自分と妃殿下、二人分の魔力を食っちゃ御子だよ。どれだけ必要魔力量が多いの。

御子はお腹の中で母親と繋がっているから、ミラ妃殿下が魔力をバンバン回復すれば御子の魔力回復にもなる。

ただ、その回復方法が問題だ。

俺が一気に魔力を回復したのは兄様の血を口に含んだ時だった。陛下だって、どこかを傷つけて

妃殿下を回復させたかもしれない。

リコル先生も待機してくれているから、まあ、大丈夫だろうけれど。

俺は何もできないから、そんなことを思いつつも緊張することしかできなかった。そんな中、ツヴァイト閣下とブルーノ君の顔を見た時の安心感ときたら……！

体調が悪い時に見るブルーノ君は、存在だけでもう精神安定剤だ。

妃殿下は座って話ができる程度には回復しているそうなので、ブルーノ君たちが旅の汚れを落としてきたら、一緒にご飯を食べつつ話をするようになっていく。

——ああでも、やっぱり早くミラ妃殿下に会いたい気がする……！

そわそわとしながら、足を速める。

兄様は、そんな俺の緊張をしつかりとわかっているのか、俺を安心させるようにいつもの柔らかい笑みを浮かべた。

「妃殿下は大丈夫だよ。陛下と一緒にいるからね」

「はい。ただ、どこか傷ついていたらと思うと……」

だってさ、絶対痛いよ！ 魔力回復のためとはいえヴォルフラム陛下が怪我なんてしたら……

痛みを考えて若干涙目になると、兄様は一瞬きよとした顔になった。

可愛すぎる。

「傷？ あ、ああ……そういう……」

でもすぐに、手で口元を覆って目を閉じてしまった。

「やばいな、アルバ可愛い……うん、可愛すぎる……」

あの方法を教えたら、アルバはどんな反応をするか……という兄様の呟きを拾ってしまい、俺は首を傾げた。

「あの方法って……？」

すると兄様は少しだけ頬を赤くして顔の前で「なんでもないよ……っ」と手を振る。

えっ、照れ顔兄様最高か……！？

今の兄様の反応が可愛すぎて、色々な不安が吹き飛んでしまった。それに、兄様は真面目な時にはこんなに遊んだりしない。

兄様の様子を見ている限り、妃殿下の体調はもう回復したってことでもいいのかもしれない。

離宮に着くと、俺と兄様はいつも通してもらいう応接室に通された。

そこに、アドリアン君とリコル先生がやってきた。

「オルシス、アルバ、あいつらは無事帰ってきたか？」

「お二人ともお疲れ様です。妃殿下は落ち着きましたよ。あとで顔を出すそうです」

そう言うと、二人は兄様と俺が座っていたテーブルの向かいに置かれた一人掛けのソファにそれぞれ座った。

アドリアン君は、護衛の役割で立っていることが多い。だから腰を下ろすところを見るのは久しぶりで、何やら不思議な感じがする。

そういえば、と俺はアドリアン君を見上げた。

「アドリアン君、ジャスミン様は一緒ではないんですね」

「ジャスミンなら、ミリー夫人のところに向かったぞ。ツヴァイトが解放されるまで別室で待つてもらふことになると言ったら、喜び勇んで『ぜひミリー先輩に新妻の心得をお聞きしなくては！』とこぶしを握っていた」

「なんですかそれ」

キリツとした顔つきのジャスミン様を思い浮かべて、思わず笑いそうになる。

いかにも女騎士という風貌のジャスミン様は、アドリアン君の奥さんだ。俺から見るととてもかつこいい女性の一人。……まあ、俺にとつてかつこいい女性の第一人者はミラ妃殿下なだけけれど。それを本人に言ったら怖いので心の中でだけ思っている。

「陛下と妃殿下のように仲睦まじい夫婦になりたいんだと、この間俺に喧嘩腰で伝えてきたぞ」

「喧嘩腰って……」

アドリアン君はそんなジャスミン様の態度をなんとも思っていないようだった。

「アドリアン君、ジャスミン君のあの態度は、喧嘩腰なのではなくて、気合が入りすぎているだけだと思えますよ」

やんわりとリコル先生が釘を刺す。もしかしたら現場を見たのかな。

リコル先生は優しい目で、何かを思い出すように視線を宙に投げた。

「彼女があなたを見る目は、とてもきらきらとしています。あなたが彼女に一步步近づけば絶対に仲睦まじい夫婦になると思いますよ」

その言葉に、アドリアン君は不思議そうな顔になる。

「一歩近づく……？ いやでも、すでに俺たちは夫婦なわけですし、俺はそんな彼女を好ましいと思っていますし」

「それを口に出して言っているのですか？ 彼女は、自分だけが一方的にあなたを慕っていると思っているようですよ」

んん？ ここで恋愛相談が始まってしまった？

アドリアン君、夫婦仲そんなに良くないのかな。見る限り、似た者夫婦でお似合いだと思うんだけれど。

「そういうことはあまり口に出すことではないでしょう」

アドリアン君はそう言つて、そつとリコル先生から目を逸らした。耳がほんのり赤い。照れてるのかな。すでに夫婦なのに。そういうことを口に出さないと拗れるのに。

そう言おうと思つたら、リコル先生が全く、と溜息を吐いた。

「アドリアン君は目の前のお二人を見習つて、ちゃんと気持ちを口に出した方がいいですよ。アルバ君もオルシス君も相手に対する想いをしっかりと相手に伝わるように口に出しているからこそ、お互いのことをこんなにも信頼していられるのです。口に出さなくても自分の気持ちをわかってもらっているなんて思い込むのはよくありません」

俺たちが引き合いに出された！

言ってることはまさに俺が注意しようとしたことだけだ！

俺は慌てて挙手してそこにツツコミを入れる。

「兄様にこの気持ちを余すことなく伝えるのはやぶさかではないですけど！ 僕としてはこれでも抑えた方で、それでもできるなら一日中兄様を褒め称え頑張りを讃嘆し兄様の素晴らしさを兄様に知ってほしいから口に出していただけのことで、別に特別なことはないんですよ」

それに、と続けようとした瞬間、兄様の手で口を塞がれてしまった。

目線を向けると、兄様は俺の口を塞いだまま、女神も霞むほどの笑みをその顔に浮かべた。

「アルバ、愛してるよ」

撃沈。

俺がどれだけ言葉を重ねようと、兄様のこの一言には敵わない。

さすが兄様。かっこいいが過ぎる……！

「僕も……」

俺の同意は、兄様の手の中に吸い込まれるように意味のない音と化した。吐息がくすぐったかったのか、くすつと兄様が笑う。

「ほら」

リコル先生が、真顔で俺たちを指さした。

アドリアン君は頭を掻いて、少しだけ顔を赤くすると、半眼で「……善処する」と呟いた。その言葉はできればやるよ、という意味合いと一緒ですよ。遠回しなお断りかな。

そんな風にふざけていたら、ドアがノックされた。

そしてツヴァイト閣下とブルーノ君が案内されてくる。

ミリイ夫人は別室で待機だそう。

ツヴァイト閣下はさつさと一人掛けの椅子に座ると、俺たちにひらりと手を振った。

「お待たせ。オルシスとアルバは出迎えありがとう。とても有意義な隣国訪問だったよ」

ブルーノ君もその隣に掛けながら、うんうん頷いている。

「色々と検討できたのはよかった。ただ、出入国に時間のかかる状態の場合、やはりレガーレを使用するのは難しいな。そこら辺はまた実際出てみて要検証。机の上でいくらあーだこーだ話し合ってもやっぱりやってみないとわからないから。閣下、頼んだぞ」

ブルーノ君の視線がツヴァイト閣下に飛ぶ。

ツヴァイト閣下は嬉しそうに頷いた。

「任された！」

ミリイちゃんと国外デート、という不埒な言葉が聞こえてきた気がしたけれど、誰一人反応しなかった。俺もスルーすることにした。

それから間もなく、ヴォルフラム陛下がミラ妃殿下を伴ってやってきた。

もう大丈夫なのかな。

陛下に手を引かれて歩く姿をハラハラと見つめていると、パチッと妃殿下と目が合った。

妃殿下は微笑んで、眉をへによつと下げる。

「ごめんねアルバ君。びつくりさせちゃったわよね。……ラオネン病の時のことを思い出させちゃってたらどうしようってちよつと心配してたのよ」

そんな妃殿下に、俺は首をぶんぶん横に振った。

「そんなことは全然大丈夫です！ でも妃殿下があつたつらさを味わってると思うと、大丈夫と言われても心配してしまいます……僕にはずっと兄様がいてくださったからとても心強かったですけれど、陛下はどうしても忙しいですし……ツヴァイト閣下も側近から外交担当になられるのですよね」

頼れる人はたくさんいるけれど、忙しそう。

肩を落とすと、座っていたツヴァイト閣下から声が上がった。

「え、俺？ 妃殿下の御子が誕生して落ち着くまでは側近続けるよ？ 政務は得意だし。今回の色々と考慮したらかなりいい機会だったから、隣国に行ってきたただだよ」

あつけらんとそんなことを言われて、俺は「へ？」と間拔けな声を上げた。すぐにでも閣下は国外に飛んでいくのかと思っていた。

「さすがにね。俺の治癒魔法を使わないと体調がよくなるなら妃殿下を放っていくわけにはいかないだろ」

ツヴァイト閣下はそう言つて、俺のおでこにデコピンをしようと構え——次の瞬間、兄様にその手をたたき落とされていた。

閣下は、笑いながら「痛いよ」と今度は兄様を狙つて指を構え、やめろと手を掴まれている。

その緩い空気に安心していると、ヴォルフラム陛下が隣に座っている妃殿下を見つめた。

「私もミラが子を産むまで少しは政務を抱え込みすぎないようにしたいと思つているんだ。もちろん主要な者とは面会するし、書類仕事はここでできるものはここです。だが、出産とは命懸けだというだろう。ここでミラも子も失うのは嫌なんだ」

「ヴォル……あなた本当に最高。ふふ、愛してるわ」

花も綻ぶような妃殿下の笑みは、俺が見てきた中で一番綺麗な顔だった。

図らずもここに集まつたのは、主人公と攻略対象者全員。

……プラスおまけの俺。

全員顔がよいのに負けてないミラ妃殿下、さすが主人公と言わざるを得ない。とはいえ、周りの人たちは皆美形なんだけどね。

この世界では、母とか俺みたいな童顔の方が珍しい。セドリック君はきらっきらの王子様風イケメンだし、ジュール君は少々陰のある美少年だし。俺？ 俺は論外ですね。

周りもなんとなく、陛下と妃殿下のやりとりに優しい視線を向ける。

その中で、ブルーノ君がひらりと手を振った。

「一応ね、ケイフォード殿に例のブツを渡してきたよ。もううまくいけば落ち着いてくるかも。百合姫も魔力は多い方だつて伯爵から聞いていたから」

その言葉に、ヴォルフラム陛下がパツと表情を真面目なものに変えた。

「そうか。これでブルーニユ王国の状況が落ち着いてくれるとありがたいんだが……。ブルーニユ

王国の隣国には、すでに形を失ってしまった場所があるからな」

「え？」

陛下の言葉に不穏なものを感じて思わず声を上げると、兄様がそつと俺の耳に囁いた。

「この国の北に位置する一つの国が、百年ほど前になくなってしまったという話は覚えてる？」

近い近い。耳に吐息がかかってぐつときます……！ つてそうじゃなくて。

「はい。じわじわと魔物の数が増えてしまつて、人の住めない場所になつていったと……宝玉の魔力がなくなつちやつたのになつてちよつと思つた覚えがあるんですが……」

荒くなりそうな息を整えて言う、兄様が蠱惑的な笑みを浮かべる。

「そう、それ。ふふ、アルバ顔が赤いよ。可愛い」

「だつて兄様の顔が近すぎて……つ、あの、それで氣になつてたことがあつたんですが、先生に訊いたところでわからないかなつてそのままにしたことがあつて」

「どんなこと？」

近いまま兄様に質問されて、心の中でうわーうわーと声上がる。

やつぱりどれほど魔力譲渡のキスにしても、いつでも兄様は女神で美形で美しいかんばせなので慣れることがない。

誰だ、美人は三日で見慣れるとか見飽きるとか言つたの。十三年たつてもまだまだ見惚れていられるよ！

「え、ええと、宝玉の魔力がなくなつた隣の国に増えた魔物が襲つていかないのかなつて。實際う

ちの国の国境付近には魔核が現れたりしたじゃないですか。魔物に他の国も飲み込まれちゃわないのかなつて思つて」

これが、北の国が滅亡したことを知つてから今までずっと疑問に思つていた内容だ。

ようやく口に出せただけで、なんとなくすつきりしてしまう。

けれど、ツヴァイト閣下により、明確に答えが出された。

「それは大丈夫。宝玉の魔力が及ぶ土地に、それ以外の土地から溢れた魔物は流入しない。逆に宝玉の魔力が満ちていても魔物はある程度出てくるが、その数が大きく逸脱することはないんだよ」

「宝玉の魔力つてすごいんですね……」

よかつた。アンフィニ山脈があるから、ある程度は大丈夫だろうと思つていたけれど、そもそも宝玉の魔力があれば魔物は一定数以上入れない。

それがわかるだけでホッとする。

安心した俺を見て、ツヴァイト閣下は意外そうに目を瞬いた。

「アルバは俺たちよりも知識があると思つてたけど、肝心なことはわからないんだな。……いや、宝玉関係は王族しか勉強しないことだから知らなくて当たり前なのか。それなのに俺、アルバはなんでも知つてるもんだと思つてた」

ふむふむ、と頷くツヴァイト閣下に、陛下が呆れたような視線を向けている。

妃殿下はすでにそういうことを勉強したんだろうなあ。閣下の言葉に「確かに」というように頷いている。

……皆、俺のことを買いかぶりすぎだけだね！

俺が知ってる知識なんて、『光凜夢幻∞デスティニー』の中に出てくるエピソードと、その後皆に教えてもらったことくらいだよ。なんで宝玉に魔力を補充すれば国が救われるのか、そもそもどうして宝玉があるのかとか根本的なことはわからない。

困ったように眉を下げると、「ここにいる者は知っていた方がいいかもしれない」と言つて、陛下自身が国の成り立ちを話してくれた。

——太古の昔、そもそもこの地は魔物が跋扈^{ばぐ}していて、人の住めるような土地ではなかったんだそう。そして魔物が増えるうちに、空気中の魔力濃度がとても高まっていった。

やがてそれは、ある一定の距離を置きながらそれぞれ固まっていた。

それが、国を支える宝玉だと言われている。

宝玉が発生するうちに、空気中の魔力濃度が落ちていった。そして宝玉の力の及ぶ範囲は穏やかな気候と豊穡に恵まれるようになった。

つまり、人が住める空間になったのだ。だからその宝玉の周りに人が集まり、最後には魔力の高い者が宝玉を管理するようになった。

——それが、各国の国王。

どの国でも、王族は別名『守護宝玉管理者』なんだそう。

ああ、だから王政なんだ、と俺は内心で呟いた。

下手に王政を撤廃したら、宝玉の成り立ちを知らない人が国政を行うことも出てくるだろう。

宝玉の力を利用しようとした結果、国を傾けたり、逆に放置してやっぱり国を傾けたりとかする人だつて生まれてしまうかもしれない。それだったら、ちゃんと管理する一族がしっかりと子孫まで教育するようにした方がよほど安心だ。

それに宝玉の周りにいる一族はおのずとその恩恵を受け、魔力の高い子孫が生まれやすいのだという。

……なるほど、ゲームではかなりロマンチックな形にまとめられていたけれど、ずいぶんシステムチックなんだね。

俺は頷くと、ヴォルフラム陛下を見上げた。

「国の成り立ちはわかりました。その国の宝玉の魔力が及ぶ場所には魔物に襲われないというもの。でも、今そのブルーニュ王国の宝玉はほぼ空なんですよ？　いくら魔物の上限数があるといつても、ブルーニュ王国が崩れて魔物の住処になったら、さすがにメノウの森での訓練は難しくなる気がします……」

しかも南の国もそうなんですよ。うちの国が数年前までは国の存続すら危ぶまれていたことを考えると、宝玉の魔力がなくなる周期は他国も同じようなものなのかもしれない。

ちなみに、このテスプリ王国と隣接しているのは、あと二国。

東と、南西にある国だ。その二国が問題ないのは、途中誰かがうまいこと魔力補充をしたからか、ちゃんと補充方法を代々伝えていたかのどちらかだろう。

うん、でもとりあえずは……

「宝玉に魔力が充満していたら、安心安全なものには変わりないですね」

「アルバがそう言うのと、何やら国の存続がとても簡単なように聞こえてくるな……」

陛下が苦笑しながら首を傾げるので、簡単だよ、と俺も首を傾げた。

「魔道具に魔力を補填するのと一緒ですよ、規模が違うだけで。だから、ちゃんと補充方法を確立させればそこまで難しくないと思います。ただその方法が簡単だと思われてしまうと、私利私欲に走ろうとする人が出てきてしまいかねませんけど」

話を聞いている限り、そう思ったんだけど、俺の言葉に陛下はさらに苦笑を深めた。

「耳に痛いな……」

「その私利私欲に走った人たちはこの王宮の敷地内に建ってる塔で元気に雑務に励んでいるわよ」
にこ、と妃殿下が笑ったことで、私利私欲に走って宝玉を壊そうとした人たちの顔を思い出した。
そうでしたね……

やらかした方々とはいえ、ヴォルフラム陛下とツヴァイト閣下の身内だ。

俺は慌てて視線を逸らした。

「ええと、それともう一つ、気になったことがあるんですけど」

俺の言葉に、皆が注目する。

ミラ妃殿下がさらっと言った。

「この際だからなんでも聞いちゃっていいわよ。国家機密をほぼアルバ君は把握しているだろうし、かといって他でホイホイ言うような子じゃないのは知ってるしね」

許可を得たので、俺はどうせなら、とさらに突っ込んで訊いてみることにした。

「魔力がなくなってる国として成り立たなくなった土地があるのなら、他にもそういう人の住めない土地がたくさんあってもおかしくない気がするのですが、実際にはそんな場所は多くないですよ」

テスプリ王国の周辺では、この国の北側の国だった場所だけが、人の住めない土地だ。

下手するとその斜め隣の国もそうになってしまうかもしれないし、もっと離れた場所の詳しい現状はわからないけれど、人の住めない土地自体はかなり少ないはずだ。

皆がちゃんと魔力補充をしているからかなって思っていたけれど、それほど簡単なことじゃないみたいなんだよね。

じゃあどうして住めない土地が少ないのか、ちょっと気になってたんだ。

「数百年に一度となると、その間に正しい魔力補充の方法だって失われるかもしれないわけですし。実際この国もそこまで詳しい内容は遺されていなかったわけですし」

俺の問いに答えてくれたのは、ヴォルフラム陛下だった。

「……そうだな。実際、魔力の多い者を大量に失いながらなんとか国を立て直したところもあるし、王族だけが犠牲になった場所もあると聞いている。そんな国はたくさん、側妃を娶ってたくさんの子を産ませていたというし……正しくこうしろ、という文獻はきつとどこにもなかったはずだ」

溜息と共に、そう教えてくれる。ってことは、うちの国に残った内容はましな方なんだ。それでもツヴァイト閣下一人を犠牲にしようとしたりしていたけれど。

「結局はどうにもできないまま宝玉に魔力がなくなり、最終的に『アビスガードイアン終焉の厄災』によって国が墜ちてしまう場合も多々あるようだ。その場合は、逃げられる国民は周りの国が引き受けるなど、ある程度の保護が国際法で義務付けられている。明日は我が身だからな」

「なるほど」

「その後、終焉の厄災が餌になる魔力を食いつくし、その身体が朽ち果てると、その魔力が地に還り、またそこに守護宝玉ができ上がると言われている」

その言葉に、俺はなるほど！ と頷いた。

「へえ……！ そうだったんですね！ だからそこまで人の住めない土地が増えないんですね……！」

「ああ。宝玉が復活するには数百年ほどかかると言われているが、宝玉が復活したらまたそこから数百年は安泰だ。その国を祖国に持つ者たちが周りの支援を受けて、復興に励むことになる」

「ローテーションと国家間の支援がとても素晴らしすぎる……！」

なるほど、これは国家間の戦争なんてやってられないわけだ。もし国同士の争いがあれば国際法に守ってもらえなくなるかもしれない。

人間同士が戦う余裕がなさすぎるしね。

「ようやくすっきりしました。ありがとうございます」

俺がこの内容を気にしていた理由は、現実的なものの以外にもう一つある。

ゲームで、攻略対象者と主人公が手を取り合わなかった時、「卒業おめでとう」だけでゲームが

終わってしまうのだ。

ぶつ切りのエンディングをなんとなく怖いと思っていただけ、あの時の主人公が語らなかった未来がようやく垣間見えた。

ただその国がなくなるってだけじゃなかった。

主人公は他国に逃げたか、魔物退治をしつつ国と共に倒れたか……んー、こんなところでゲーム設定の闇が見えてしまった。こんなやばい設定は正直いらなかったよ。攻略対象者たちの闇だっ

てもうさ、精神的にぐりぐりくるようなものばかりだったし。

うちの国が、兄様が天寿を全うするまで安泰確定なのはよかった。本当によかった。俺も頑張っ

て割り込んだ甲斐があるってもんだ。

頷いていると、ツヴァイト閣下が軽い口調で聞いてくる。

「アルバのことだから、もしかしたら俺たちが宝玉に魔力を満たせなかった時の記憶も持ってるんじゃないか？」

俺は首を横に振った。

「ないです」

「ほんとにか？」

「本当に。それ以後の記述がないんです。なので、残念ながらそんな未来は僕にはわかりません」

きっぱりと答えると、閣下はぐくりと喉を鳴らしてから、取り繕うように笑った。

「は、はは、そっか。記述が、ないのか。それはそれは……俺たちの国、ほんとと無事でよかった

ああああ……」

胸を撫で下ろすしぐさと表情が、ツヴァイト閣下が本気で安堵していることを伝えてくる。そりゃあね、兄様が暮らす国を守るのは当たり前のことだからね。

「視えた未来は変えられるっていうの、わかってるだろ、閣下」

ブルーノ君にツッコまれて、ツヴァイト閣下は「そうだよな」と努めて明るい声を出した。

ブルーノ君がミラ妃殿下に視線を向ける。

「ところで、ミラ妃殿下、調子がよくないって聞きましたが」

その言葉に、妃殿下が苦笑する。

「そうね。ヴォルに魔力を譲渡してもらわないと、何もできないことが増えたわね」

「それは調子がよくないどころの話じゃないんじゃない？」

ガタリと椅子から立ち上がったブルーノ君に、リコル先生がそつと目を伏せる。

「高確率で、御子様は『ラオネン病』と思われます。御子様の魔力の減り方、溜まり方がアルバ君とそっくり同じですので」

俺たちにとっては既知の事実。

ただ、ブルーノ君にとっては初めて知る情報だ。ブルーノ君は目を見開き、手で顔を覆った。

「まじかよ……胎児じゃ、何もできねえだろ……」

それをなだめるように、ツヴァイト閣下が背中をトントンと叩いた。

「でも、ブルーノがいるじゃない。元気に生まれてしまったら、あとはブルーノたちが治せるって

ことでしょ？」

ヴォルフラム陛下も、同じくその言葉に続く。

「ああ。それまでの発作時は、私とミラ二人で協力して子を守るから、そのあとは頼む、ブルーノ」

二人の顔は、すっきり晴れやかだった。

今日もあれだけ体調を崩したのに、二人には絶対に御子を守ってみせるという覚悟が見て取れた。

「強いなあ、お二人とも……」

心で思ったことをついポロリと零してしまうと、お二人がきょとんとした顔を俺に向けた。

「私たちは、頑張ってきたアルバの姿をずっと見てきているからな。ここで踏ん張らなければ、国王としても父親としても私は失格となってしまうだろう」

「そうそう。アルバ君とオルシスとブルーノがいたら、何があってもなんとかなっちゃいそうだしね」

二人の言葉に、ブルーノ君は天を仰ぎ、それから顔を覆う手をぐしゃぐしゃと動かした。

「は、はは、俺責任重大ですね。……まあ、できる限り全力で頑張りますけど」

はあ、と顔から手を外すと、きりっと真顔になる。

ブルーノ君のグリーンの目がちかっと光った。

「——とりあえずミラ妃殿下は安静に。レガールはいくらでも運ばせます。ただ、レガールを食したとしても、身体的に繋がっている以上、ミラ妃殿下の魔力は御子にいつてしまいます。だから魔

力の回復だけは絶対途切れさせないでください」

その言葉に、妃殿下が頷く。

ブルーノ君は、リコル先生に視線を向けた。

「あとでご婦人用に調整した魔力回復薬も届けます。それと、リコル先生に随時魔力の確認をしてもらってください。常に魔力がない状態が続くと、身体がそれを平常だと思い込んで自己回復能力が低下してしまうので」

そこで、ツヴァイト閣下が手を上げる。

「あ、陛下の仕事も減らして。俺とオルシスでその分フォローするから」

「ツヴァイト、助かる」

「西隣も多分そのうち立ち直るから、今は御子に集中しようか。例のアレ、渡してきたから」
ツヴァイト閣下の言葉に、ブルーノ君がフハッと噴き出す。

その後ジト目を俺に向けた。

なに、俺なんかした？

「あのまま渡したのか」

「そ。あれさ、装飾とかがしたら絶対に内容が変わるだろ。あれが一番簡潔で正しい。な、アルバ」
「へ？」

いや、だから何。

うろたえていると、ブルーノ君がそつと俺の書いた『宝玉の魔力補充方法』がセシル君のお姉さ

んのところに渡ったことを教えてくれた。

あー、あれかあ。手持ち無沙汰だったから作ったあれね。

監禁生活を思い出して、俺は少しだけしょっぱい顔になった。

あの時の先王様、何を言い出すかわからない怖さがあつたんだよなあ……

あ、そうだ。

「そういえばあの時、ちょっと気になったことがあつたんですけど」

手をポンと叩いて、呟くと、またしても皆の注目を浴びてしまった。

兄様が苦笑している。でも小さく頷いてくれたので、俺はその疑問を口に乗せた。

「あの時、先王様がしきりと僕の属性を気にしていたじゃないですか。それに、ヴォルフラム陛下が閨属性だから駄目だとかなんだとか揉めていたとお聞きました。もしかして、宝玉に触れるのに、魔力の属性が関係あるんですか？」

首を傾げると、皆が声を合わせて「いまさら？」と呟いた。

う……と、俺は言葉を詰まらせる。

「ここにいる全員が宝玉に魔力を注入できるとわかっていたので、そういう属性なんかは関係ないのかなって思ってたんですが……」

ただ、よく考えたらゲーム内ではすべてミラ妃殿下が誰かと国を救っていた。つまり、光属性の魔力は絶対宝玉に入っているのだ。

だからもしかしたら、光属性は絶対に欲しいってことなのかなと思ったのだ。

その場合、あのマニュアルはまだ未完成ってことになる。

……それは隣国に今回つちやダメな奴では？

俺の言葉に、ヴォルフラム陛下とツヴァイト閣下が目を見合わせる。

「古い文献には、光属性の者が手を取って宝玉に光を灯したと書かれているものがあつたな」

「俺もそれ読んだ。だから、もう俺しかないのになつて。あのクソア……ん、ん、元王太子が俺と手を取ったところで連携魔法は絶対に発動しない自信あつたし。それはあのクソオ……ん、ん、先王陛下もおんなじだしなあ」

そこへミラ妃殿下が口を挟む。

「絶対……ではないんじゃない？　だって属性に優劣はないんだし。私も身動きが取れない時に文献を読んでみたけれど、属性が確定されたものはなかったわ。どの属性の者が復活させたか、くらいしか書かれていなかったわよ。言い回しが迂遠すぎて意味を読み取れない文献も多いし。アルバ君の書いたものは本当にわかりやすくてよかったわ」

にこりと素晴らしい笑顔で褒められてしまった。同時に、俺が書いたメモをミラ妃殿下も読んだことを知ってうっと怯む。

俺はごによごと小さな声で言った。

「あれは兄様とブルーノ君の努力ででき上がったブルーノ君餡があつたからこそ確立した方法ですから……」

褒めるなら二人を褒めてほしい。その時は俺も心行くまで参戦するからね。

そう続けると、兄様が立ち上がって、ふわりと俺を椅子の後ろから抱きしめた。

「アルバ……そもそもが、あれを見つけたのがアルバなんだからね。一番の功績はアルバが貰うべきだった。『終焉の厄災』の時も、宝玉の魔力注入の時も、アルバの功績は何一つ残っていないのが、僕はとても心残り……っていうか思い出したらだんだん腹が立ってきた……先王陛下、本気でアルバに余計なことじゃないじゃないか……」

声がだんだんと低くなっていくうえ、俺を抱きしめる腕の力が強くなっていく。

ぐ、魔王降臨兄様、本当に格好すぎる……！

あの頃はまだ俺の属性のことは秘密だったし、王家にレガーレのことをほぼ伝えてなかったし、何より俺が治ったことも秘密だったから、皆が俺を守るために隠してくれたんだもん。文句の一つもない。何より……

「最高に輝いている兄様を一番の特等席で見ることができた、それが一番の報酬ですから」
他の誰にもあの手を取らせなかったんだよ。

小さく小さく呟くと、兄様の腕がさらにぎゅっと俺を引き寄せた。

「アルバが可愛すぎて胸が痛い……誰にも渡さない。僕のアルバ」

「兄様……っ」

耳が、耳がとても幸福すぎて倒れそう。

は……俺こそ胸が痛い……

「はい終わり」

ブルーノ君に頭をぺしっとされて、兄様の腕の力が緩んだ。

わざわざ椅子を回って兄様のところに来てくれたらしい。いつものやりとりで和んでいると、アドリアン君がくすくすと笑い始めた。

「オルシスとアルバの怒り方、全く同じだな」

「怒り方？」

アドリアン君の言葉に首を傾げると、ほら、とアドリアン君が笑いながら教えてくれた。

中等学園生時代、アドリアン君に拉致られた時、クラスメイトに対して俺が、今の兄様と同じ怒り方をしていたって。

リコル先生も「確かに！」とハツとした顔をしている。

ミラ妃殿下も耐えられないとでもいうように口元を手で押さえて笑い始める。

深刻な空気はどこかに飛んでいってしまったようだった。

でも妃殿下の心境が穏やかなら、それに越したことはないよね。

その後、ミリイ夫人とジャスミン様も合流して和気あいあいと女子トークが繰り広げられ、夜の帳が降りた頃によりやく解散となった。

俺と兄様とブルーノ君で、同じ馬車に乗り込む。

隣国組の皆の荷物はすでに先に持っていてもらっているそうで、ブルーノ君もとても身軽な格好をしている。

三人で馬車に乗るのは本当に久しぶりすぎて、何やら感慨深い。

王宮に通う際はブルーノ君がいないから、学園に通っている時以来だ。学園の時だって、途中からアドリアン君とツヴァイト閣下が交さってきてわいわいと通ったわけだし。

兄様もそう思っているのか、表情がとても穏やかだった。ブルーノ君が無事帰ってきたことにほっとしているみたい。そんな女神のような優しさの兄様に惚れ直す。

「ブルーノ、道中どうだった？」

「んー国境から先はかなりすごかった。そのうち終焉の厄災が出てもおかしくない感じだったな」

「間に合うと思うか？」

「飴は渡してきたよ。ケイフォード殿と百合姫がしっかりと状況を把握していたから大丈夫じゃないかと思う」

「そうか」

「ん」

二人の会話はそこで止まった。

静かな車内に、馬車の車輪が道を走る音だけが響いている。

家に着く頃には、すでにルーナたちは寝ているかな。

結構離宮で話し込んでしまったからなあ。

「もうすぐ、学園が始まっちゃうなあ……」

そうしたらまた兄様と一緒に登城はお預けか。残念。

がっくりと首を垂れていると、兄様がくすつと笑って囁いた。

「アルバの学園祭は、しっかり休みを貰って見に行くからね」

その言葉に、一気にテンションが上がった。

「見に来てくださるんですか!? あ……僕、剣術大会にも魔術大会にも出ないでした……見せ場がない……!」

あああと顔を覆ってうなだれる。

兄様はそんな俺の頭を撫でくれる。

「一緒に学園内を歩けるだけでも僕は嬉しいんだけど。それに、一緒に演奏は聴くでしょ?」

その言葉に、ブルーノ君が肩を竦める。

「学園祭デートだな。じゃあ俺は遠慮しておこうかな」

「そう。学園祭デート。ルーナも行きたがるから、きつとブルーノも一緒に行くことになるだろうな。ジュールの剣術大会を見てくればいいじゃないか」

「あー。そうか、そうだな」

学園祭デートというパワーワードが耳に飛び込んできた俺は、その後の二人の会話はすっかり耳を通り過ぎていった。

学園祭デート……学園祭デート! こここんな素晴らしい体験、俺何かいいことしました? それとも、幸運の前借り? あとで大どんでん返しとか、ないよね!?

二、学園祭と市井の子

兄様と一緒に登城ができるルンルン長期休暇が終わり、学園が始まった。

長期休暇が明けたらすぐに学園祭がある。去年はずっと治癒魔法の練習ということで救護テントに詰めていたけれど、どうやら今年も同じ状態になりそうだ。

まあ、そうだよな。剣も魔法もろくにできない俺が出て、当たった方がかわいそうだ。

というわけで、きつと来年も救護班として活動することになるんだろうと思う。

兄様とブルーノ君が出ていた時のドキドキワクワク感をルーナに味わわせてあげられないのがとても残念だ。

……と思って謝ったところ、ルーナはあっけらかんと「ブルーノ兄様と一緒にジュール兄様を応援するから問題ないわ」と答えた。

あとでそつとジュール君に教えてあげよう。

そしてやっぱり裏仕事をするのは生徒会とクラス委員がメインで――



「楽団の手配、終わりました。それと今年はサリエンテ公爵閣下とヴィネーラ公爵閣下が来賓としていらっしやるそうです。セネット公爵は、セドリック君の応援を個人的にしたいので来賓扱いで

の来訪は難しい、とのことだ」

「わかった。救護班はアルバ君担当だな。とはいえ生徒はもう一人だけだから、そこまで大変ではないと思う。今リコル先生が王宮の方に駆り出されてしまっている、臨時の養護教諭であるロッソ・アルトモント養護教諭がアルバ君と共に救護テントに入ることになる。アルバ君は臨時養護教諭と挨拶はしたかい？」

生徒会長の言葉に、俺は頷いた。

学園が始まった初日のことだ。

リコル先生の代わりになるという養護教諭の先生を学園長先生から紹介された。

「ロッソ・アルトモントです。リコル教諭のことは私も存じています。しっかりと後を継げるように努力いたします」

生徒である俺にまでしっかりと頭を下げたその人は、今年二十六歳になるというのに、兄様たちと同じくらいにしか見えなかった。

上から下に向かって、オレンジから赤のグラデーションとなっている髪はとても綺麗だ。

肩より少し長いその髪を、彼は細いリボンでくくっていた。

ただ、こげ茶色の瞳はまっすぐ俺を見ているはずなのに、どこか違うところを見ているように感じられる。その視線の合わなさに、スッと背筋が冷えた。

けれど、手を差し出すロッソ先生の姿は丁寧そのものだ。

『ラオネン病』から完治なさった方とお会いできるのは、とても光栄です。私も薬学を手掛ける者として、ヴァルト殿を尊敬しております」

手を差し出されて、握手をする。丁寧な動作とゆったりとした口調が、ちよつと疲れているように見えて、少しだけ心配になった。

なんていうか……その微笑みは社交界でよく見るような、作られた表情のようで。

「リコル殿からはお話を伺っております。アルバ君……職務上、そう呼ばせていただいても？」

「もちろんです。あと、僕は生徒ですので、もう少し砕けてくださって大丈夫です」

俺が頷くと、ロッソ先生はほっとしたように息を吐いてから、もう一度口を開いた。

「リコル殿からはアルバ君の魔法制御と実技の個別学習を頼まれているけれど、問題はあるかい？」

「大丈夫です。よろしくお願いします」

挨拶から授業内容のことを少し話し合つて、学園長室を出てきた俺は、ドアを閉めた瞬間ようやく緊張が解けた。

リコル先生と挨拶した時も同じように紹介してもらったけれど、ロッソ先生はなんていうか、リコル先生みたいな情熱は全くなさそうな人だった。

まあ、リコル先生は『ラオネン病』にこだわりのあったからこそ熱量だったから、ロッソ先生が普通なのかな。

事務的なやりとりしかなかったから、まだ先生がどんな人かいまいちわからないけれど、仕方ない。

……あとで兄様と義父に養護教諭が代わったことを教えておかないとかな。今まで刻魔法が発動してもリコル先生のところに逃げる事ができたけれど、これからはできないかもしれない。

「ちよつと大変かもな……」

俺の属性のことは、気軽に教えちゃいけない。

これからセドリック君とジュール君の負担を増やしちゃうので申し訳ない。

何せ、俺が全く自身の属性を制御できないから。っていうかあのラオネン病の発作とほぼ変わらない魔力暴走を制御できる方がおかしい気がする。他の人だって魔力が暴走すると自分では魔力がなくなるまで止められないっていうし。

でもだからって、仕方ないよね、で済ましていいわけじゃない。

「頑張ろう」

ぐつと拳を握って、俺は気合を入れた。

気合を入れただけでどうこうなる問題じゃないんだけどね！

——と思ったんだけど、ロッソ先生は予想以上だった。

「うん、治癒魔法はとても上手に発動している」

出会った数日後、授業の始まったその日に、ロッソ先生は自分の流した血をタオルで拭きながら平然とした顔で言った。

俺が一応治癒魔法を使えると知ったら、躊躇^{ためら}いなく自分の手を切ったのだ。俺に治すようになら

だらと血の垂れている腕を差し出してくる。

俺の方が血の気が引いたよ。そもそも俺は流血なんて好きじゃないんだ。むしろトラウマにしかないよ。

「なんてことをするんですか……っ！ 光よ、その尊い力で先生の腕を治せ！」

必死で魔力を込めると、ロッソ先生の腕の傷は綺麗に消えた。そして、さっきの言葉である。

この人、養護教諭やっていいの？

確認のためだけに自分で怪我しちゃダメでしょうが！

という叫び声は、保健室内に響き渡った。

他に誰もいなくてよかった。

しかし、俺の言葉にロッソ先生は首を傾げるばかりだった。

「いや、一度能力を見せてもらわないと教える側もどうしていいかわからないので」

「それはわかるんですけどね……」

俺の欲望のせいで兄様が美しい腕に傷をつけるはめになった事件を思い出しちゃうからほんとやめてほしい。

ぜえぜえ息を切らした俺を置いて、ロッソ先生は自分の腕を眺めている。

「学園祭の救護テントにいても問題なさそうだな。勉強の方は優秀と聞いたけれど、私はどのように教えればいいだろうか。リコル先生はまず基礎から教えていたと言っていたが」

何事もなかったようにそう言われて、俺は息を整えた。

「ええと……そもそも、魔法が使えなかったのも、魔術の授業もあまり受けていなかったんです。なので、何をと聞かれても僕にはすべてをとしか答えられません。それに、そんなに優秀ではないですし……いつでも必死ですから」

「じゃあ、教科書に沿ってやってみようか。私は治癒魔法じゃなくて薬草や回復薬作りが本当の専門だから、治癒魔法はほぼお任せする形になると思うけれど」

「それは、はい。大丈夫です。薬草というと、ロッソ先生は地属性なのですか？」

「そう。薬草を育てるのは得意なんだよ。そして私が一番尊敬しているのが、君の家の研究所にいるヴァルト所長だ。あの人の薬学知識は世の宝だよ」

半分無気力そうに見えた瞳に、ふっと光が差す。

そっか。ブルーノ君は今や薬学の第一人者だもんね。

さすがブルーノ君。

ちよつとだけロッソ先生の好感度が上がる。

同時に、ロッソ先生が深々と頭を下げる。

「リコル先生が戻ってくるまでの期間だけれど、よろしくね」

俺も「こちらこそよろしく願います」と頭を下げた。

それ以後は、自ら怪我人になることもなく、何とか普通に魔法の基礎や魔力の制御練習なんかを受けられるようになった。よかった。

——というわけで、ロッソ先生のお眼鏡にも叶ったので、学園祭では俺が救護班の取りまとめをすることになった。

救護テントに詰めるのは、ロッソ先生と俺、そして他に水属性の治癒魔法が使える先生一人。それと、学園の保健室の方にも治癒魔法が使える先生が配置された。そっちは俺の管轄ではないけれど、薬品や情報の共有は忘れないようにしないといけない。

そして一年生の生徒が一人。その生徒も水属性の治癒魔法は使えるけれど、実戦で使うような攻撃魔法や剣術などはほぼ使えないらしい。

次の日保健室で顔合わせをしたんだけど……

「よろしく願います！」

そう勢いよく頭を下げたのは、入学式の時に顔を見た、市井から通う女子生徒だった。

彼女の名前は、リリーアン。

こげ茶色の髪を無造作にみつあみに編んでいる。長めの前髪の隙間から見える瞳は茶色で、どنگりのようにくりくりとしていた。

そういえば生徒会長が、可愛い顔立ちだったとかなんとか言っていたような……

それを思い出して、つい目の前の女子生徒をまじまじと見てしまう。

にこやかな彼女は、俺を前にしても緊張はしていないようだった。

……確かに顔は可愛い？ のかな。

俺にはよくわからないけれど。

「僕はアルバ・ソル・サリエンテと申します。救護班の代表です。よろしくお願いします」
そう言うと、彼女はパツと表情を明るくした。

「入学式の時はお世話になりました！先輩が一緒だと聞いて、すごくホッとしたんですよ。一応今までずっと街で治癒魔法を使っていて得意ですので、なんでも言ってください！」

ぐっと拳を握ったのを見て、これはもしかしてミラ妃殿下と同じくらいに元気いっぱいなのか……？とおののく。

でも噂でも一年の市井の女子が……みたいなものは全く聞こえてこないから、通常の授業では普通なんだろう。

「フレッド先輩やダミアン先輩がともにお世話になっているというのを聞いて、お話しできるのをとても楽しみにしていました」

あ、フレッド君と知り合いなんだ。

そんなことを思いながら、俺は話し続けるリリーアン嬢に相槌を打っていた。

初めての顔合わせは、ほとんどがリリーアン嬢の話で終わってしまった。

「リリーアンですか？

僕の家がある区の個人商会の娘さんだと思います。学園に彼女が来るまで

は僕はほとんど面識がありませんでしたが、両親がたまに彼女の家から薬草を買っていたはずです。ダミアンは家が大手商会で繋がりががあるので、彼女のことを僕よりはよく知っているかと」

帰りの馬車で訊くと、フレッド君は色々とりリーアン嬢について教えてくれた。

市井の生徒たちは、何かあった時に連携できるようにと、月一くらいで先生に呼ばれて色々と聞かれているらしい。その時にある程度は話をするんだって。何か要望があったらジュール君が聞くことになっているそうだ。ジュール君……もしかして在学中は市井の生徒すべての世話を焼かないといけないのかもしれない。大変すぎる。今度何か差し入れよう。

そんなことを思っていると、フレッド君が、あ、と思い出したように声を上げた。

「一度だけうちで彼女らしき子を見たことがあります。ルフトの発作が酷くて、昏睡状態から二日ほど意識が戻らない時があつて、その時に」

「ルフト君に治癒魔法を掛けてくれたのかな？」

「恐らく……。僕は学校に行かないといけなくて家にいなかったんですが、学校から帰ってきた時、見知らぬ女の子が家から出てくるのが見えて。両親は何も言わなかったけれど、ルフトが意識を取り戻したから、もしかしてつて思っています」

「そうなんです。市井の学校では一緒ではなかったんですか？」

「んー……同じ区なので、同じ学校だとは思いますが、授業の時間が決まっているわけじゃなくて、自分が行ける時間に通う感じなんです。だから、僕とは通う時間帯が違ったんだと思います。家の手伝いをしていたって学園で紹介された時に言っていたので」

「へえ……市井の学校ってかなり自由度が高いんですね」

すごいなあ、と思わず感心していたら、フレッド君が苦笑した。

「いえ、だからこそ、自力で勉強しないといけないくて、大変だったんですよ。勉強したくない子供

は全然身につかずには終わりますし」

「あーなるほど」

聞けば聞くほど、俺が通った中等学園との違いがわかって、思わず声が出る。

市井の方もかなり気になるなあ。

俺が向かうのって主に画材が置いてある店のある通りくらいだし。危ない場所には近づけないし。……ミラ妃殿下を追いかけてヤバイ場所に行ったことは一度だけあるけどね。あの時のミラ妃殿下はやる気満々の笑顔でとてもこわ……ゲフン、可愛らしかった。

俺が頷いていると、フレッド君はそれにしても……と呟いた。

「リリーアンは救護班なんですね」

「うん。剣を使ったことがないし、魔法もほぼ攻撃には使ったことがないからって」

「アルバ様なら安心して下につくことができますね」

にこりとそんなことを言われて、その信頼感たっぷりの笑顔に、動きを止めた。

その俺への溢れんばかりの信頼はなんだろう。俺ほどへっぽこで頼りない上司はいないだろうに。ううう、その信頼を裏切らないように頑張らねば……

そんなこんなで日々は忙しく過ぎ去り、学園祭まであと数日に迫った。

俺は今日も打ち合わせや、治癒魔法の勉強などを黙々とこなしていく。そうは言っても、俺は救護担当なので皆ほど忙しくはない。一方で周りの生徒会やクラス委員たちはとても忙しそうだった。

特にセドリック君は生徒会長と共に動き回っていたので、昼休みすら捕まらない。

だから今日も、俺はジュール君と二人でサロンに向かうことになった。

ジュール君は涼しい顔で割り当てられた仕事を淡々とこなしている。

すごいなと呟くと、ジュール君はいつもと変わらない顔でそんなことはない謙遜した。

「セドリック様は生徒会の仕事とクラス委員の仕事、そして引き継ぎのための生徒会長の仕事までこなしていますからね。僕はまだ二つしか受け持っていないので楽なものです」

「二つも受け持つてる時点ですすごいと思うんですけど。僕なんかほぼ用意は先生任せの救護班です」

そう言うと、ジュール君は真面目な顔で首を横に振った。

「一番大事なところですよ。そして当日一番忙しいのがアルバ様じゃないですか。しかも今年はリリーアン嬢が一緒ですよ。不埒な生徒が出そうでちよつと怖いんです。なんなら僕が代わりたいくらいに……何かあれば、オルシス様と兄上が悲しみますから」

「ジュール君が怪我をしてもブルーノ君が悲しむからね？ 当日はルーナと一緒にジュール君の応援をするって張り切ってたよ」

そつと教えて、ジュール君はきよとした顔になった後、口元を手で押さえて、顔をそむけた。ふと見えた耳が、赤くなっている。

「お忙しいのに、申し訳ないです……」

そう言いながらも、嬉しそうなのは気のせいじゃないはず。

すっかり仲良くなったジュール君とブルーノ君を内心で応援しつつ、俺は足取り軽くサロンへと向かった。



そして、学園祭当日がやってきた。
今日の俺の戦闘服は、白衣。

制服の上に白衣を着て、剣術大会の会場の隅っこに設置された救護テントに待機する。

救護テントとはいえ、とても立派で、中もとても快適なものだ。

校舎の保健室でも、もちろん患者の受け入れをしているけれど、軽い怪我などはすぐ近くのこのテントで事足りるようになっていいる。

数年前に救護テントに詰めていた先生が「大会を見たい」と学園長に文句を言ったことで、会場にテントが設営されたと、去年リコル先生から教わった。

酷い怪我や症状の場合はすぐに医者がいるところに運ぶけれど、幸いにも出場する生徒がそこまで酷い怪我をすることはほとんどない。

だから、ジュール君はあんなことを言っていたけれど、多分二人の方が忙しい。

それにセドリック君もジュール君も学園祭の実行委員の傍ら、剣術大会も魔術大会も両方出るそうなので、とんでもない忙しさになるはずだ。

去年は二人ともここで少し休んでいたくらいだし。今年もぜひ休みに来てほしいところだけれど、一緒にいるのがリコル先生じゃないし、リリーアン嬢がいるから休めないかもしれない。
そんなことを思いながら、俺はテントに設えられた棚を見つめた。

「備品問題なし、魔力回復薬問題なし、救急箱問題なし。担架は大丈夫、簡易ベッドも大丈夫」

一つ一つ必要なものをチェックしていく。後ろでは俺の言葉にうんうん頷きながら、リリーアン嬢がチェックリストに書き入れてくれている。

彼女とは、この数日間ずっと一緒だったけれど、確かに救護や事務作業にはすごく慣れているようで、何度も助けられている。

一方で、まだ為人すらよくわからないのが……

「ロッソ先生、問題なしです。あ、あとはこのチェック項目の紅茶の茶葉とお菓子なんですが……これは？ 今年から取り入れたんですか？」

ロッソ先生だ。

よくわからない項目があつたのを見つけてそう訊くと、ロッソ先生が首を傾げた。

「いや、こつて暇だから。手持ち無沙汰な時間は、お茶でも飲んで凌ごうかと」

「ええと……そんなに暇ではないと思いますよ……？」

養護教諭にしてはあんまりな言葉に口元を引きつらせると、ロッソ先生は目を瞬かせた。

「え、そうなの？ 私が学生の時、救護テントはあつてないようなものだったから……」

いまいちやる気のなさそうなロッソ先生の態度に、様子を見に来てくれた周りの先生たちが

苦笑している。

そのうちの一人、ロッソ先生と共にテントに配属されたカティ先生がロッソ先生の背中をバンバン叩く。

「ロッソ先生、暇なのは校舎内の保健室の方よ。テントの方は細かい怪我をした子たちが案外ひっきりなしに来るから覚悟しときなさいよ」

一緒にここに詰めてくれる一年の魔術構築理論の女傑だ。

カティ先生の言葉に、ロッソ先生が細い目を見開く。

「ええ……？　じゃあ今から保健室の方と交換してようかな」

「何言ってるのよ。リコル先生の代わりにアルバ君の指導を頼まれているんでしょ？　アルバ君はまだラオネン病の後遺症が残ってるんだからちゃんと見てなさいよ」

「そうなの？　無理はしないように。救護班が救護されたら洒落にならないからね」

「う、耳が痛い……気を付けます」

最後の言葉は養護教諭らしいものだった。

俺はびしっと背筋を伸ばす。

そんなわけで、一応和やかに始まった救護テント詰めの学園祭。

兄様は最終日だけ休みを取って、一緒に演奏会に行くことになった。

母とルーナ、ブルーノ君は今日から見に来るんだけどね。何やら母はジュール君とフレッド君を心行くまで応援したいらしい。

義父は、セネット公爵が休みを取っているので、今回は来られないんだって。残念……って俺は全く出ないからいいんだけどね。

『これから剣術大会を開催いたします』

遠くからアナウンスが聞こえてくる。

テントからも会場はちゃんと見えるので、テント内も観戦モードだ。

ちゃんと会場が見える位置に椅子を並べて、座った。

周りで応援する人たちとは違い、俺たちは屋根付きの贅沢観戦だ。

そつと端においてある机を見ると、すでにロッソ先生がお菓子を用意していた。早すぎるよ。

セドリック君とジュール君は去年優勝、準優勝だったこともあり、シード選手に選ばれている。

だからしばらく出番はない。今頃生徒会としてわたたと走り回っていると思う。

広い会場では、四試合が一気に行われている。

最初是一年だ。

「迫力ありますね……」

リリーアン嬢がぐつと手を握り締めて観戦している。

確かに、初めて見るとそう思うかも。俺は自分の腕を棚に上げて、可愛いなあ、なんて一年生の対戦を見ていた。兄様たちの剣術をずっと見てきたから、目だけは肥えているのだ。

すると、隣からカティ先生の笑う声がした。

「あら、これが三年生になると、さらにすごいわよ」

カティ先生にそう言われて、リリーアン嬢の目が輝いていく。

「こういう風に剣を使える人を見ると、すごいなあって思いますね」

「ふふ、かわいい。リリーちゃんは家では水属性の治癒魔法を使っていたのよね」

「はい。たまにご近所の体調が悪い人に治癒魔法を掛けていたりしました！」

その言葉にカティ先生が目元を和ませる。

「偉いわねえ」

「いえあの……教会や医局などにかかる和高いからって、どうしてもって言われて。治癒魔法を掛けるとお小遣いを貰えたので、つい」

褒められたリリーアン嬢はすぐに居心地悪そうに両手を振っている。その頬が赤くなっているのを見て、あらあら、とカティ先生が目を開く。

辻ヒュー的なアレだったのかな、と話を聞きながら俺は思った。

ってことは、ルフト君に治癒魔法を掛けたのもその一環だったのかな。

小さい頃から自分のことができることとお金を稼いでいたリリーアン嬢は、童顔な顔つきの割にはしっかりしているようだった。商家の娘として、しっかりと商売のいろはを叩きこまれていたのかもしれない。

「リリーちゃんは、この学園を卒業したら、何かやりたいことってあるの？」

対戦する一年生を見ながら話すカティ先生とリリーアン嬢の声をなんとはなしに聞く。

「卒業したら……そうですね……うちが店をやっているので――」

「あつ」

リリーアン嬢の話を遮るように、ロッソ先生が声を上げる。俺も声を上げそうになった。

一番近くの会場で、思いっきり剣が当たった生徒が倒れたのだ。

ロッソ先生が担架を手に、俺に目くばせした。

「アルバ君、あの生徒、もしかしたら脳震盪を起こしているかも。担架で運ぼう」

「はい！」

ロッソ先生と共に会場に飛び出していく。

まだ転がっている生徒の近くに膝をついて、声をかける。

「大丈夫ですか？ 意識はありますか？」

生徒は声を出さないでうずくまっている。

俺はロッソ先生と目を見合わせた。

「アルバ君、とりあえず担架に乗せるよ」

「はい！」

ロッソ先生が地面に置いた担架に生徒を転がそうとしたところで、「僕がやります！」と対戦相手の生徒が俺の代わりに倒れている生徒の足を持ち上げてくれた。

そのままロッソ先生と生徒二人で担架を持ち上げ、運び始める。

あれ、俺は？

慌てて後を追ってテントに戻ると、あの生徒は簡易ベッドにいつも簡単に乗せられていた。

……まあ確かに俺が担架を運べる保証はなかったけれども！
「アルバ君」

声をかけられて、ハッと我に返った俺は、すぐに生徒に治癒魔法を掛けた。
「光属性の治癒魔法……？」

後ろから、リリーアン嬢が呟いているのが聞こえる。
光属性は市井では珍しいらしいからね。

ゆっくりと治癒魔法を掛けると、すぐに生徒は目を開けた。

「……あれ、ここ」

「救護テントです。吐き気とか頭痛とかありませんか？」

顔を覗き込むと、白かった生徒の頬に赤みがさした。

「大丈夫です。あ、僕、負けちゃったんですね……」

「でも、頑張りましたよ」

ちゃんとはつきりと話しているし、視線もしっかりしている。

これなら医者まで連れていかなくても大丈夫そうだ。

ほっとしていると、立ち上がったその生徒に、ありがとうございます！ と大きな声でお礼を言われてしまった。無事そうでよかった、と顔を緩めながら、クラスと名前を書いてもらう。

「一年A組のデニス君ですね。もしあとから具合が悪くなったら、すぐに来てくださいね」

「はい！ ありがとうございます！」

ガツと立ち上がって、もう一度深く俺に向かって頭を下げた一年生は、ハラハラしながら見ていた対戦相手の生徒と共にテントを出ていった。

「早速お仕事ですね」

苦笑しながら名簿を置いたところで、今度は腕が痛いという生徒がやってきた。

そこからは雑談をする暇もなく、ひっきりなしに生徒たちが救護テントにやってくる。

リリーアン嬢も水属性の治癒魔法で外傷を次々治していく。

その慣れた手つきに目を瞠^{みは}った。すごい、手慣れている。

それから一時間と少しほど。一年生の対戦がすべて終わり、ようやく休憩らしい休憩にしたところで、カティ先生がにこやかにリリーアン嬢に声をかけた。

「リリーちゃん治癒魔法上手ねえ。大きな医局にだって入れそうよ」

「え、本当ですか？ ……あー、でも、私は跡を継がないといけないから……」

カティ先生の誉め言葉にパッと顔を輝かせたリリーアン嬢は、その後すぐに顔を曇らせて、ぽつりと呟いた。

両親は商店を営んでいるんだっけ。

もしかしたらリリーアン嬢は実家を大きくするためにこの学園に入学したのかもしれない。

もし貴族の友達ができて、顧客になってくれたら、それを足掛かりにもっと大きくなるかもしれないし。

でも、本人の顔を見る限り、治癒魔法を使っている時の方が、家の話をする時よりもとても楽し